日本医史学雑誌第三十一巻一号
昭和六十年一月三十日発行

昭和五十九年十月三十一日受付

道興治疾方

宮下三郎

一

この数年のあいだに、三部の『道興治疾方』を拝見することができたので、紹介したい。

第一は、私が長年勤務した大阪の杏雨書屋所蔵の一冊本である。題簽に「道興造像記并治疾方」と墨書し、巻首に三行の空欄をおいて「道興造像記」次行に雙行小字で「碣高二尺五寸。広一尺二寸。十二行行十七字。正書在洛陽西南伊闕山」とある。次に「都邑師道興造石像記并治疾方」とあり、以下造像記・処方と続く。墨つき十一枚で十行廿一字。末尾は小字雙行の多紀元堅の跋で終わる。左端に「天保己亥五月端午後二日借鈔医学所蔵。喜多村寛記」とあり、巻首に「喜多村氏蔵書之印」があるから、のちに『医方類聚』二百六十六巻を活字刊行（一八六一）し、法眼で奥医師となった喜多村直寛（一八〇四―七六）の写本である。天保己亥は十年で一八三九年に当たる。天保十二年には医学館教諭になった。

第二は、私の新しい職場である関西大学に新しく収蔵された内滕湖南文庫本である。一冊で表紙には「北斉道興治方」と墨書し、巻首の空欄三行に「金石萃編三十五」「賜進士出身誥授光禄大夫刑部右侍郎加七級王昶譔」「北斉三」と、それぞれ朱書する。「道興造像記」以下は十行廿一字で喜多村本と字体まで似るが、末尾の元堅の跋の部分がちがっている。紙を換え大字のまゝ「右都邑師道興造像記并治疾方」以下「疑即葛氏本」で切り「右平津館読碑記」とあり、はじめの「洪頤煊平津読碑記云」は削っている。次にまた紙を換え大字で「北斉都邑師造像記并治疾方跋」とあり「丹波元堅識于

奚暇精舎」で結ぶ。このあとに慶応乙酉十一月の森約之の書きこみがある。次にまた紙を換えて、木と禾の合字は棗であり黍ではないという考證があって「文政九季四月廿二日抽齋澀江善」で終わる。森鷗外の史伝小説で有名な渋江抽齋（一八〇五―五八）は津経藩医である。首に「弘前医官澀江氏蔵書記」「森氏」「岡氏棄感」「炳卿審定善本」「湖南秘扱」印があり、伝来を示している。なお表紙裏には「丁未六月幸田巨浪君持贈　炳卿」とあるから、明治四十年（一九〇七）に歴史家の幸田成友博士が内藤湖南に贈られたのである。湖南は明治三十三年から三十九年まで大阪朝日新聞社の記者として、いま私の住む大阪に在り、幸田氏も明治三十四年から三十八年まで、大阪市史編纂主任として大阪に在住した。明治四十年には、湖南は新設の京都帝国大学文学部へ、成友の実兄の露伴とともに講師として招かれた。湖南は露伴より一年、成友より七年の年長だった。

第三は、国立公文書館内閣文庫所蔵の水漬一冊本である。表紙には朱で「道興治疾方　全」とある。首に「多紀氏蔵書印」「存誠薬室」「大学東校典籍局之印」「日本政府図書」印があり、伝来を示しており、喜多村本の原本で多紀元堅の手跋本である。末尾の小字雙行の結びは「文政乙酉歳立秋後三日丹波元堅識于奚暇齋」とある。多紀元堅（一七九五―一八五九）は元簡（一七五五―一八一〇）の五男で、分家した。兄の元胤（一七八九―一八二九）の歿後江戸医学を盛りたて、法印に進み楽真院と称した。文政乙酉歳は一八二五年で元堅は廿九歳である。

『道興治疾方』は元胤の『医籍考』に載らないが、岡西為人等の『宋以前医籍考』では『隋書』経籍志に載る「釈道洪方一巻」に近いと考えたらしく[1]、そこに付録し小島宝素の蔵書目録を引いて、文政九年（一八二六）の小林道隆の校刊本があるというが、私はまだその刊本を見る機会に恵まれていない。

多紀元堅が一八二五年に編纂した『道興治疾方』という書物が、数種存在することを述べた。昭和八年（一九三三）に、日本医学史学会から刊行された森潤三郎著『多紀氏の事蹟』に載らないことは、いうまでもない。

二

元堅の跋に「唐以上医方、今之所存」はまれで、この『治疾方』はその稀な資料の一つであるから、王昶の『金石萃編』（一八〇五刊）の第三十五巻から録出し、「肘後」「千金」及「外台秘要」と比較したという。

いま『石刻史料叢書』の『金石萃編』と合わせてみると、行数字数とも同じで、始めの空欄の三行は、すぐ前の資料「残造塔銘」の王昶の按文の末尾の三行に当たり、渋江本の巻首の朱字の書入れは、その巻三十五の首三行を移したものである。

全十一丁は、つぎの八種の記文から成る。

一、造像記　大斉武平六季歳次乙未六月甲申日功訖。都邑師つまり仏教信仰組合の精神的指導者の道興が主催したのである。武平六年は五七五年に当たる。

二、造像記下の薬方。（C）

三、記左方上例の薬方。（A）

四、記左方下例の薬方。（B）

五、右壁の薬方。（E）

六、顧炎武『金石文字記』所引。

七、畢沅『中州金石記』所引。

八、按碑文首云以下、王昶の按文であって「所刻諸方、凡療病之證二十九、療病之方、薬物鍼灸共百十八也」といい、用はみな古体である。また「碑内諸方、又見耀州石刻、大小三碑、存字闕文、与此悉同、無標題」のため孫思邈千金方といい伝えられているが、現刊行本と対校しても針灸法五処薬方六処しか同じでない。造像の年代から十年と離れずして

生まれ、伊闕山から西へ五〇〇キロの唐の都の長安（西安）で、博く全国に効果のある処方を求めた孫思邈（五八一―六八三）の著作に、この碑文が採録されなかったとは、理解しがたいと言う。

王昶の『金石萃編』は、古代から遼金までの金石文を集録した点で画期的な書物だったから、以後これを補缺するものが多く表われた。方履籛の『金石萃編補正』（一八九四刊）もその一つで、左壁の内側に廻りこんだところから『萃編』に漏れた十一行行十字の碑文（D）を紹介している。

不幸な日中戦争の最中、のちに京都大学に移管されたが、当時外務省の中国研究の一環としてあった京都の東方文化研究所の、水野清一・長広敏雄両氏は『河南洛陽龍門石窟の研究』（一九四一、座右宝刊行会）に、拓本と王氏・方氏の二資料を使用して校正した録文（二九五―九八ページ）を提供し、薬方洞（第二十洞）の項に説明を加え『隋書』経籍志の『雑療方十三巻』や『唐書』経籍志の「徐叔和撰雑療方二十巻」などの遺文ではないかと述べられた。以上A～Eで示したのは、水野・長広の使用した記号である。

いまでは碑と薬方の成立年代に差があるのではないか、という観方が一般的のようである。[2] しかし研究者によって、処方や薬種の数えかたさえ一定しないのは、[3] 現存資料の風化によるものであって、止むを得ないというべきか。

三

元堅は『金石萃編』の記事に、浙江の洪頤煊の『平津読碑記』（一八八六刊）の関係部分、この碑が葛洪の『肘後方』に基づくのではないかという部分を引用した上で、龍門の『道興治疾方』がまず建てられ、ついで耀州に覆刻されたのだが、嘉靖以前に耀州の碑はこわれてしまったのだろうと論じている。なぜか元堅は『龍門方』との関係について、何も触れていない。

まず『龍門方』という医書が中国にあったか、無かったか問題である。書目類に載らないから無かったとはいえない。

日本では『医心方』（九八四成）に五十五条の引用があるとされ、[4] 約九十五という人もある。『道興治疾方』をこれと関係づけるならば、王昶は針灸とも百十八方と数えているから、半数或は大半が『医心方』に含まれることになる。

日本に『龍門方』という医書が古く存在したことは、疑いがない。『医心方』や『医略抄』（一〇八一成）に引用されるほか、元堅が生まれた翌年寛政八年（一七九六）に父の元簡が刊行した、深江輔仁の『本草和名』（九一八成）の薬名の別名の出典としてあげる三十三部の書物のなかに『龍門百八方』が載る。『本草和名』第九巻草中の爵床（キツネノマゴ）の一名に「雀荏草　出龍門方」とある。紀元十世紀に、刻まれて数世紀しかたっていない龍門の薬方洞から百八方が写し取られ、山を越え海を渡り飛行機も汽車もない時代に、はるばる三千キロの西方から日本に伝えられたのだろうか。もしそうだとすれば写したのは中国人か、日本人か。はこんだのは誰か。三千キロの旅をさせた原動力は何だったのか。

開国まぎわ、元堅は江戸医学の実力者として、半井家に伝わる古写本『医心方』の影印刊行に力をつくした。後世に残るその仕事は、嘉永元年（一八四八）の『備急千金要方』の宋版の翻刻に引き続いて、安政元年（一八五四）に始まったが、完成（一八六〇）を見ずして彼の一生は終わった。十世紀末に成った『医心方』に半数以上が収められる『龍門方』と、残缺の多い考古資料としての『道興治疾方』との関係について、深く広く学識を積んだ晩年の元堅の意見が聞けないのは、残念としかいいようがない。

四

ここで、中国医学に限らないけれども、古代中世の医術の二重構造について、注意を喚起しておきたい。これは体制に対応するもので、支配層と被支配層、知識人と庶民、官僚と農民といった従来の封建社会の分析法と同じ観方の延長上にあるが、古代中世社会の医療の特長として、二重（多層）構造を考慮せざるを得ないと思う。

さきに私は経済的な面から、これを考えたが、[5] 文化的な伝統の力関係をも含めて、先進的な金額のかかる知識人の医療

と、より単純で土俗的な農民の医療とのあいだに、ずれが生じていた。封建社会に羊羹のような一様な医療状態を想定するわけにはいかない。都市の新しい医療と、農村的な古い形態が共存していたことは、むしろ当然のことであろう。しかもその関係は新と旧の対立といったものではなく、とくに旧は単なる旧態ではなく、安定的ではなく流動的で、新しいものに絶えず影響を受け、変型を強いられたのであろう。夫のリードによって新しい環境に順応していく花嫁のように、変わらざるを得なかったのである。その度合いは、時代により地理的な環境によって、千差万別であったにちがいない。

右のような一般論の中に『道興治疾方』を置いて見るならば、旧体制下の知識人であった王昶の、第二章に述べた疑問に答えることができるのではないかと思う。都邑師道興の支持母胎は、造像記に見られるように邑人（農民）である。その治疾方は、半数が経験的な単方の治療法であるが、半数は複方から成り、新しい薬物療法の強い影響が認められるのである。洛陽に近い農村の人々の身近な民間薬とはいえない黄連、洎沙、大黄、人参、蜀漆、巴豆をはじめとして、中国に産出しない桂心や丁香まであり、都市の市場を経由したと考えられる漢薬が、かなり見られる。

博く求めた孫思邈の著作に採用されなかったのは、新奇さと複雑さと多様性を好んだ長安の知識人の目にかなう処方と、見なされなかったためであろう。後進的で古臭く感ぜられたということは、むしろそういう処方が田舎へ行けば一般的で、どこにでもころがっていたのではないか。辺疆の少数民族の国だった日本にそれが伝わったのは、その程度の知識が技術移転し易かったという、文化の実用上のレベルの問題もあろうが、何処にでもあったものが伝わったという確率的な状況もあったのではないか。

『道興治疾方』が中国で問題にならなかったのは、むしろそれだけ中国の医学の歴史が厚くふくらみ濃淡があり、多様であったということではあるまいか。中国の古代中世の医療の実態については、まだ現在の私には見えていない部分が、かなりあるのではないかという感想をいだく、このごろである。

五

さいごに蛇足を述べることを許していただきたい。

私は一九八〇年中国科学院自然科学史研究所の招きで、日本科学史学術訪中団が組織されるや、その団員として三月廿五日に洛陽にはいり、廿六日の朝伊川に沿って南へ十二キロ河南省龍門研究所をおとずれ薬方洞に到達し、これを見学することができた。終始山本徳子会員と同行した。

一九八二年に私は中国を再訪した。その年の四月から勤務先が変わるなど身辺多忙だったが、中医研究院医史文献研究所を頼り、医学科学史訪中団の一員として六月廿七日に西安に着き、いよいよ六月廿九日に西安を真北に八十キロ、トヨタのマイクロバスで二時間弱、陝西省耀県にいたり東に一キロ海抜八一二メートルの薬王山に登り、孫真人の太元洞に参詣し、千金宝要以下の碑を見学することができた。このときは赤堀昭・大塚恭男両会員と同行した。

いずれも本稿と直接のかかわりをもつ中国行だった。しかし結局日本へ帰って鎖国時代の先人の秀れた業績の数々に親しむうちに、むしろこれこそ出発の原点だという結論に到達した。合計一万二千キロを超える私の旅行は、日本を一センチも離れることがなかった先学の仕事に及ばないのだから、それはくたびれもうけだったのだろうか。とにかく多紀元堅の『道興治疾方』をはじめとする中国古医書の研究と、十世紀に日本に伝わった謎の多い書物『龍門方』について、日本の諸賢とともに中国の友人に情報を提供することによって、問題の一層の展開が得られるのではないかと考える次第である。

献辞と謝辞

本稿を碩学小川鼎三先生の霊前に捧げます。私は先生の門下生ではなかったが、医史学の片隅で糧を得はじめて三十

年、先生は終始大先輩として行方にそそり立っておられた。追悼論文の執筆の機会を与えられた会員各位に感謝します。両度の研究旅行を可能にした中国の李経緯所長・馬継興付所長はじめ同学諸賢、及び中山茂・藪内清両団長と団員各位に感謝します。八二年の夏、参考文献の蒐集にご助力下さった徳島大学薬学部の藤多哲朗教授、および本文中に挙げた図書館の関係各位に、お礼を申しあげます。

付

北斉都邑師造像記并治疾方跋。

唐以上医方、今之所存、除仲景経外、唯肘後鬼遺二書、其餘莫得影響、如此北斉都邑師治疾方、従来湮晦不伝。近時王述菴氏昶撰金石萃編、昉拈之于第三十五巻中、余一覧舞躍、遽為録出、参之肘後千金及外台秘要、往々相合、不止述菴所挙也。蓋諸書所有者、固足以校同異、其所無者、又足以広見聞、而存古方之遺、然則豈可不亟為之表章、以供拯済之用乎。又嘗撿洪氏頤煊平津読碑記、亦載此碑、然其説踳駁不足拠、姑附録于後焉。顧此碑既建于伊闕、而耀州亦有覆刻。耀州之石、蚤泐於嘉靖前、其地為真人故居、世遂譌伝為千金方、而述菴特得其舊搨以校補之、其言与馬理千金方序、可以相證明焉。如洪氏則僅見隆慶六年、秦王所勒千金宝要、以摘述葬多見其不知量也。噫比季呉舶、以隋唐石本、陸続齎来、則何知此碑亦不得好縁、為挿架之珎、吾拭目而徯之。

文政乙酉歳立秋後三日丹波元堅識于奚暇斎。

注

(1) 『宋以前医籍考』(人民衛生出版社、一九五八) 七六五ページ、編者は現物をご覧にならなかったのではないか。この著作を正当に評価した文献を私は知らない。

(2) 王有生「北斉薬方」『医学史与保健組織』(一九五八) 三一四ページ。赤堀昭「龍門薬方と耀県孫真人祠」『啓迪』(一九八三) 一号二四―二六ページ。

(3) 紀華「現存最早的石刻薬方」『人民保健』(一九五九) 八六六ページ。呉燕宝・王雨若・張覃沐「竜門薬方洞」『人民保健』(一九五九) 八六七—六八ページ。赤堀昭「龍門薬方と陳蔵器本草拾遺上下」『漢方研究』(一九七九) 三〇八—三一二、三四七—三五三ページ。

(4) 岡西為人・佐土丁「外台秘要、医心方、證類本草等所引用之古医書」『東方医学雑誌』(一九三七) 五四三—五五三。また注③の赤堀、上、三一〇ページ。

(5) 拙稿「隋唐時代の医療」『中国中世科学技術史の研究』(角川書店、一九六三) 二八六ページ。「敦煌本張仲景五蔵論校訳注」『東方学報』三五冊 (一九六四) 三二八ページ。

On the Taohsing chih-chi fang or the Taohsing Treatment, written in the six century, China.

by
Saburo MIYASHITA

The Taohsing Treatment, inscribed in Cave 20 of Lung-men near Loyang, in 565, cannot now be easily read due to weathering. in Japan, there is another source of the Taohsing Treatment. The 55 recipes(?) of the Lung-men Treatment can be fond in the Ishimpo compiled by TAMBA Yasuyori in 984. But a rough comparison between the Lung-men recipes and the Taohsing Treatment reveals many discrepances. The inconsistency between the manuscript introduced into Japan and the inscription at Lung-men is a mystery still to be solved.